



TOYOTA GAZOO Racing GR86/BRZ Cup2022 Rd.4 SUZUKA

堤選手がフロントローから好発進し シリーズ戦としては4年ぶりの優勝を飾る

Qualifying #7 / 2nd / 2'26.411 • #700 / 11th / 2'27.037
#770 / DNQ / 3'09.176

▶ 2022.10.29.SAT

▶路面コンディション：ドライ ▶気温：24℃ ▶路面温度：26℃

今季から新型 GR86/BRZ にマシンをスイッチし、レギュレーションも大幅に変更しリニューアルされた「TOYOTA GAZOO Racing GR86/BRZ Cup」。ニューマシンを導入するための準備期間を設けたことで開幕戦が7月となり、今季は5大会6戦のシリーズで競われることになっている。

「T by Two CABANA Racing」は2018年より前身となる86/BRZ Raceのプロフェッショナルシリーズに参戦し、今季はシリーズ参戦5年目となる堤優威選手が7号車に、経験豊富な阪口良平選手が700号車に、そして若手ドライバーの石坂瑞基選手が770号車に乗り、3台体制でGR86/BRZ Cupを戦うこととなった。

7月に開幕したGR86/BRZ Cupは毎月1大会が実施されていて、第4戦は鈴鹿サーキットが舞台で10月29日(土)に予選、30日(日)に決勝レースが実施された。前戦の十勝スピードウェイでは7号車が専有走行時にクラッシュを喫し、車両は修復が不可能となってしまった。チームは急遽、代替のマシンを用意するために奔走し、レンタルという形で競技車両の手配ができた。チームは僅かな期間の中で新たなマシンを仕立て、鈴鹿サーキットに3台のマシンを並べた。

レースウィークは27日(木)から練習走行をスタートし、初日は2本のスポーツ走行枠があり、まずは持ち込みのマシンセットやコースコンディションを確認。今戦からブリヂストンの「POTENZA RE-09D」がプロフェッショナルシリーズでの使用認定を受け、3台と

もニューモデルを履いて戦うこととなった。

28日(金)は9時30分と11時から30分間のスポーツ走行枠があり、11時からの枠はタイム計測が行なわれる専有走行となっていた。7号車の堤選手は2分26秒805で2番手、700号車の阪口選手は2分27秒059で5番手、770号車の石坂選手は2分27秒798で16番手となり、新作タイヤの威力が発揮される結果となった。

開幕戦から天候不順が続いたGR86/BRZ Cupの予選だが、今回は快晴のもとで行なわれる。29日の10時50分から15分間で実施された予選は、気温24℃と10月末にしては暖かく、長袖では汗ばむコンディションとなった。

10時50分のコースオープンとともに堤選手と阪口選手はアタックを開始。堤選手はセクター1、2で全体ベストタイムを刻むと2分26秒411と前日のタイムをさらに削った。阪口選手は車両のセットアップが合なかったこと、ややまとめきれない部分があり2分27秒037。石坂選手は2台のマシンとは異なり、15分間の予選時間の最後にアタックを行なう。全セクターで専有走行のタイムを更新すると2分26秒736をマークして6番手と計測モニターに表示された。結果として、堤選手はフロントローの2位、阪口選手は11位、6位に入ったと思われた石坂選手だったが、アタックラップの4輪脱輪によってベストタイムが抹消されてしまう。ウォームアップラップのタイムが予選通過基準を超えてしまったため、嘆願書を提出し最後尾から決勝レースをスタートすることとなった。



▶路面コンディション：ドライ ▶気温：22℃ ▶路面温度：27℃



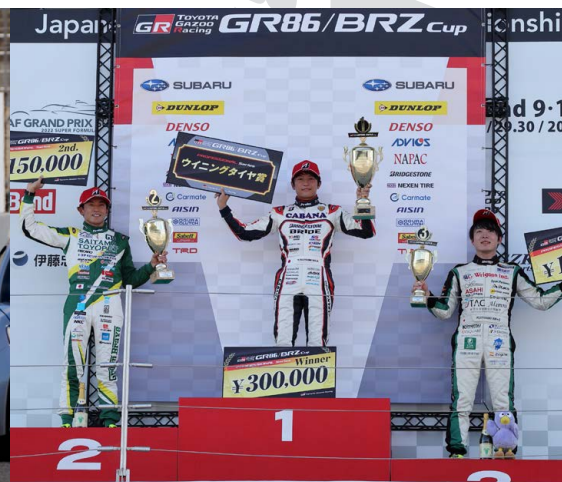
決勝レース日となった10月30日(日)も好天となり、今回のレースウィークは全セッションがドライコンディションでの走行となった。8週の決勝レースは予定通りの10時25分にフォーメーションラップが開始される。フロントローの2番手に並んだ堤選手は、抜群のスタートダッシュでポールポジションの菅波冬悟選手に並びかける。菅波選手は斜行してブロックラインを通るが堤選手も引かず、1コーナーまでに先行した堤選手がホールショットを奪った。トップに立った堤選手は後続を引き離したいところだったが、1周目が終了したコントロールラインでの2番手との差はわずか0.3秒。2周目のコントロールラインでも0.3秒差のまま、3周目になると0.6秒とわずかにギャップを拡げた。ただ4周目になると2番手が160号車の吉田広樹選手に入れ替わる。中盤を過ぎると堤選手のペースが鈍り、2番手とのギャップが周回ごとに縮まっていく。最大0.8秒あった差が7周目の時点では0.1秒差となり、テールトゥノーズに迫られる。だが、ファイナルラップには持てる力をすべて発揮しギャップを拡げてトップチェッカーを受けた。堤選手の優勝はシリーズ戦では2018年の第2戦SUGO以来で、GR86での嬉しい初優勝となった。

11番手からスタートした阪口選手はメカニカルな問題のために1コーナーまでの加速区間でポジションを下げてしまう。それでも混戦の中盤グループの中で安定した走りを見せ、徐々に先行するマシンとの差を縮める。4周目にはポジションを上げてス

タート順位の11番手に戻す。タイヤのピークグリップを超えたはずの5周目には自己ベストタイムの2分29秒421をマークし、さらに上位を狙った。だが、抜き切ることができず11位でチェッカーを受けた。正式結果ではペナルティを科された選手がいたことで10位となりポイントを獲得した。

予選でのタイム抹消により最後尾からスタートした石坂選手は、1ポイントが付与されるファステストラップを狙う作戦を採った。オープニングラップに先行するマシンと間隔を空けると、2周目に作戦を実行。2分27秒929とトップを走っていた堤選手よりも0.7秒速いタイムをマークするが、3番手走行の選手が2分27秒748のタイムを記録し、わずか0.2秒の差でファステストラップを逃した。その後は、安全に走行を重ねて8周目に31番手でチェッカーを受ける。正式結果ではペナルティを受けたマシンが後方に下がったために30位となった。

3戦目まではニューマシンのポテンシャルを引き出せない状況が続いたが、今回の予選では3台ともにトップ10内に入る可能性があるほどの好走をみせた。そして堤選手はフロントローから優勝を果たし、ポイントランキングはトップと9ポイント差の2位に浮上した。次戦の岡山は早くも最終戦となるが、週末に2戦を実施するダブルヘッダーのため最大で44ポイントが獲得できる。今戦の好調さを維持し、最終戦では3台ともに活躍することを期待したい。





Hiroshi Ando

Team Chairman/Director's Comment

安藤 宏チーム代表兼監督

前回の十勝で車両を損失するという緊急事態に際し、多くのご支援をいただき3台のマシンを鈴鹿サーキットへ持ち込むことができました。お力添えをもらったすべての皆さまに感謝申し上げます。このような厳しい状況なかでの優勝は格別で、スポンサー様各位や関係者の皆さまへの僅かなお返しができたと安堵しています。また、今戦から導入されたPOTENZA RE-09Dのデビュー戦に花を添えることができ光栄です。今回の結果で、堤選手はポイントランキングも2位ということで次戦ではチャンピオンを狙う走りを、阪口選手も得意な岡山での好走、石坂選手は今回の予選でドライでも上位を走れる可能性を見せてくれました。最終戦は3台ともに好成績を残せるよう努力を続けていきます。



Yuui Tsutsumi

Driver's Comment

#7 T by Two カバナ BS GR86 堤 優威選手

前戦のクラッシュによりマシンを失い、チームや関係者の皆様に多くの迷惑をかけてしまいました。短い期間の中で新しいマシンを用意してくれた皆様に感謝しています。挽回したいという思いと、今回はPOTENZA RE-09Dのデビュー戦だったので絶対に結果を残したいと挑みました。それが優勝という最高の形になり良かったです。レースウィークは走り出しから好調で、上位に入れる自信がありました。専有走行、予選とともに2番手で、決勝レースはスタートで前に出られれば優勝できると思っていて、まさにその展開となりました。久しぶりの優勝でシリーズランキングは2位となったようで、次戦の岡山でも連勝を狙いたいです。



Ryohei Sakaguchi

Driver's Comment

#700 MOTUL TWS GR86 阪口 良平選手

今回からPOTENZA RE-09Dを履き、内圧設定も含めてパフォーマンスを引き出せたと思います。専有走行ではトップと約0.3秒差の5位で予選ではさらに上を狙ったのですが、少しセットアップが合っていない感でした。決勝レースではメカニカルな問題でスタートポジションを守れませんでした。良いペースで追い上げることができ、結果的には10位でポイントを獲得できました。個人的には満足できるリザルトではないですが、チームとしては3台が同じタイヤパッケージとなり、多くの活かせるデータが取れたと思います。次回は早くも最終戦ですが、得意な岡山なので上位入賞を目指して挑みます。



Mizuki Ishizaka

Driver's Comment

#770 FORCE LABO カバナ GR86 石坂瑞基選手

今回は第3戦まで使用していたマシンから変更しての参戦となりました。走り出しはエンジンなどを含めてやや重たい印象でしたが、走行を重ねるごとに状況は改善しました。また、今回から使用したPOTENZA RE-09Dは乗りやすく、走り方をタイヤに合わせる必要がなく徐々にパフォーマンスを引き出せるようになりました。予選でのタイム抹消は自分のミスでチームに申し訳なく思っています。決勝レースではファステストラップを狙いにいきましたが、ギア選択に迷うところがありコンマ2秒足りませんでした。結果は予選でのミスがすべてでしたが、ラップタイムは良かったので岡山では期待できると思います。



Noboru Yamazaki

Chief Engineer's Comment

山崎 登チーフエンジニア

まずは十勝でのクラッシュから僅かな期間で3台をサーキットに持ち込むことができホッとしました。また今戦はPOTENZA RE-09Dの実戦導入となり、キーポイントはいかに使い方を身につけるかだと思っていました。幸い持ち込みのセットアップが合っていて、3台ともタイヤのパフォーマンスを引き出すための作業に走行時間を費やせました。結果として堤選手が優勝し、阪口選手も10位、石坂選手は予選のタイム抹消がなければ上位に入れていたはず。今戦はタイヤが変わったこともありますが、セットアップも含めてチームとしてGR86の理解度が進みました。優勝して雰囲気も良いので、最終戦では3台ともに上位に入れるよう準備していきます。